孤独からは逃げられない

澄葉　照安登

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
孤独からは逃げられない

【Ｎコード】
Ｎ２３２１Ｗ

【作者名】
澄葉　照安登

【あらすじ】
孤独でいたからこそ、そのままがいい。そう願っても、そう願ったからこそ彼の前に彼女は現れる。そこで彼はどうするか、春川透音の自己紹介から始まるカオスなバトルファンタジー（？）

誤字脱字があればすぐにでも感想欄に書いてください。

プロローグ

今の時代には大変珍しい空き地。深夜を迎えた今、そこに一人の少年が立っていた。塀に寄り掛からず、芝生に座りもせず、ただ直立不動のまま塀を見つめている。何かそこには無い物を見ているような焦点の合っていない目で。

とはいっても、彼は何かを見ているわけではない。ただ、真っ白な頭の中をさまよっているのだ。地図を無くした旅人のように。

よく見ると彼の顔立ちはとても幼く、小学生高学年から中学一年生くらいの年頃だろう。

もう上着が必要になる季節だというのに彼は紺のジーパンにシンプルな黒のTシャツという格好だった。もう十二月も半ばを過ぎているのになんでそんな風な格好でいられるのだろう。

彼はこれからどこへ行くのか、どこへ行けばいいのか、あても無く、どうしていいか分からず頭の中の世界に入り込んだ。

「……はぁ……」

とりあえず彼は歩き出す。あまり人の多い時間帯や、人通りの多い場所には行きたくないので今行動するしかない。

彼には親がいない。いや、親どころか親族すらいない。彼が小さいころに何らかの理由で死んでしまったらしい。彼は家族のことを思い出すたびに思う。もしかしたら自分が生まれたせいで全員死んでしまったのではないだろうかと。

しばらく歩くが、めんどくさくなる。すぐに足を止めて、今度は空を見上げる。

星が全く見えない暗黒の空。暗雲が世界すべてを包み込んでいるかのように。

やはり彼はそのまま立ちつくす。どこかに座ろうともせずに。

ただ聞こえてくるコオロギの鳴く声。住宅街の中、緑が最も多く存在する公園。そこから聞こえてきたコオロギの鳴き声につられて向

かう。本当に行く場所がない。
なぜ彼は行く場所がないのか。いや、まずなぜ彼はこんな真夜中に町をさまよっているのか、そこが不思議だ。
でも、そんなことは一言で説明できる。彼には帰る場所がないからだ。家もない、友達だっていない、知り合いすら一人もいない。なぜなら彼は人と接することをしてこなかったから。
親族がいないということは生活費が入ってこないということだ。当然彼は働いて稼がなくては生きていけない。
でも彼はそれをしなかった。
いや、違う。出来なかったのだ。
人と接することができない彼にとっては、誰かに何か頼むことどころか話しかけることすらできなかったのだ。
人と接することができない。誰かとかかわりを持つことができない。彼はいつも孤独だ。この世で孤独に耐えられる者など一人もいないだろう。けど彼は耐えている。彼が人と接することを許してしまえば、彼だけじゃない、全ての人が孤独になってしまう、彼はそういう者なのだ。
遊具がほんの少ししかない緑の公園。そこで何も出来ずにまた空を見上げる。
でも今度の空はさっきと少し違っていて、雲が多少動いたおかげで所々星空が覗いていた。
月が少し顔を出すがすぐに雲で隠れてしまう。月の明かりが消えて、少しあたりが薄暗くなる。もともと月がよく出ていたわけでもないので大して変わらないのだが。
静寂の空間、それに暗黒の空が相乗効果をなして彼がさらに孤独な者に思えてくる。
彼は再び歩き出そうとはせず、目線を前に移しそのまま、また止まってしまう。
「……こんな時間に、何をしてるの？」
と、暗闇の中から人の声がした。声のオクターブから言って女性で

まず間違いないだろう。……いや、両声類という男性であるが女性と同じ声を出せる、それと反して女性でありながら男性と同じ声を出せる、というのがいるらしいので断定は出来ないが。
だがそんな事を考えるのではなく、まずはその声がどこから聞こえてきたのかが分からないのだ。暗闇のせいで周りがよく見えないのでシルエットすら発見できない。木の葉がゆれる音のほうを反射的に見てしまうのはしょうがない事だろう。
「こっちこっち」
女性の声がもう一度聞こえてくる。
だが、女性というにはまだ早いような気がする。まだしっかりした女性の声ではなく、少し幼さが残る……と言っても中学生くらいだろうか。なぜ中学生がこんな時間に何も無い公園にいるのだろう。
それよりも、何故その女性は彼の行動を見る事が出来たのだろう。
しばらくここにいて暗闇に目がなれたせいだろうか。
彼は誰もが当然抱く、今のような疑問も感じずに、木の葉が落ちる音すら聞こえていないといった感じで目線を動かさない。
だが、彼の右斜め前くらい、彼が今向いている正面を北だとしたら東北東の向きあたりから足音が聞こえてきたので、彼は目線をそちらに向けた。
「迷子にでも……なったのかな？」
その言葉が終わるとともに足音も一旦やむ。
この時間に迷子の子どもがいたら不思議すぎるが、そういう疑問は彼の頭には無い。
「……」
彼はただ無言を貫き通す。
「……あれ？　もしかして聞こえてない？」
この女性は俗に天然と呼ばれる人種だろうか、という疑問も彼は抱かない。
また一歩足音が近づいた。彼はさっきとは違って睨むような目線で女性を見る。

「えーと、あ！　そうか、まずは自己紹介からだね」
勝手に自己紹介を始めようとする女性がまた立ち止まる。すると雲の間から月明かりが地に届く。それが丁度女性にスポットライトをあてるようにして顔や体系、服装などがはっきりと見えるようになる。
見た目は少年と同じ年ごろだろう。体系は普通、どちらかと言ったら良い方なのだろう。服装は制服と思しき紺色のブレザーと、陰に隠れていてよく分からないが少し明るめの色のスカート
顔立ちは……美少女とでも表現するのだろうか、とても優しそうな瞳と綺麗な唇、さっきの天然さが見て取れる眉毛、髪型も言うのであれば背中の中間までのセミロングの髪の毛。多分美少女と部類されるのであろう。
「春川透音（はるかわすみね）。今年から中学生になった十三歳。誕生日は九月十二日、O型の女の子です」
自分だけ自己紹介を終わらせてふぅ、と息を吐く。そして目の前にいる男の子を見つめて「早く自己紹介してっ」と懇願しているようだった。
でも結局彼は自己紹介をしようとはせず、目線を真正面に戻した。聞こえないふりをしていた。意味のなさないことだから。
自己紹介すらまともに成り立たない……、それどころか会話としてすら成り立っていないこの会話が彼の周りを変えた。

孤独な者

人気の無い居場所、そんなもの、いくらでもあるわけでは無い。森の深くや、未発見島――俗に言う無人島とかならば、本当に誰もいないということがあるだろう。だが、街中では路地裏に行っても人間はいるものだ。物好きな人間もいる。

朝日がビルの間から差し込む道路、そこにたった一人、少年は立っていた。

なぜ誰もいないか、そんなのは簡単だ。朝日が昇ったばかりだからだ。車はたまに通るが、人はまだ全くと言っていいほど通っていない。五十代くらいのおじさんがジョギングをしている姿は一度会ったが、それ以外は何もない。

時刻は午前五時。冬場だから日の出の時間帯も少し遅い。こんな冬場の朝に、早朝に出かけようとするなんて言うのは、物好きの考えだろう。

少年はただ歩く。行き先は、決めてない。目的があるわけでもない。ただ、歩いているだけ。ただ、しいて言うなら人気がない場所に行きたい、人気が少なければどこでもいい、そう少年は思うのだ。

何かが矛盾している。少年はそう思うが、矛盾などという言葉を使えるほど教育はできてない。おかしいんじゃないか、と思うのが精いっぱいだ。

人気がない場所に行きたいのなら、なぜ道路などという場所にいるのか。わからない。彼のことを知らない人間はわからない。つまり彼以外のだれにも彼のことは理解できない。

前から自転車に乗った男の人が近づいてくる。新聞を配っている、高校生のアルバイトのようだ。なんとも定番のバイトだろうか。最近ではコンビニやハンバーガーショップなどの方が定番な気がするが。

少年は前から来た自転車を避けるために道路の端による。

「……朝か……」
少年は空を見上げるなり言った。今まで気付いていなかったらしい。なぜそんなことにも気づかなかったのか、意識が向かなかったから、関心が向かなかったからだ。ほかのものに向いていたから。彼の意識はいつもその一点に集中している。
一度止めた足を再び動かす。なぜかはわからない。そうしなくてはいけないから、そうとしか言えない。
「……ここじゃ……だめだ……」
少年はそうつぶやくと、やはり行く当ても決めずに歩き出す。
人が、ぱらぱらと現れ始める。出勤のために電車に乗る大人。犬の散歩をする仲のいい親子。
（そろそろ、戻らなきゃいけないかな）
そう思った少年は、自分の居場所とも呼べる場所に向かって歩き出した。いつも彼が日が昇っている間に使用する隠れ家とも呼ぶべき場所だ。
（疲れたな）
そう思いながら歩いていく少年の足は、ただ無関心な落ちているごみを蹴っ飛ばしただけだった。

殺風景な場所の代表、廃墟病院。取り壊しがされていないのが不思議なくらいの場所だ。
実はここは人気の場所だったりする。心霊スポットという方面で。だが、それも今は昔の話になってしまったからこの少年はここにいるわけだが……。
取り壊しがされない理由もその心霊現象が影響だ。取り壊し作業は何度もおこなわれた。そのこともあり壁がところどころ崩れていたり、階段も不安になるほどボロボロだ。この廃病院が原形を保てているのは不思議としか言えない。
少年はその病院の決まった場所にいる。いつもそこにいる。
廃病院の最上階、すなわち屋上。

周りはフェンスがあったはずなのだが、それはもうまるっきりなくなっている。ところどころが抜けているわけでは無く、全くないのだ。物干しざおも転がっているが、虫に食われたみたいになっていたり、真ん中から見事に真っ二つに折れていたりする。

こんなものがいまだに残っているということはこの病院がつぶれたのはそんなに昔じゃないと思えてくる。

周りの風景を見て、少年はつぶやく。

「……落ち着く……」

街の明かりがなぜか遠くに見える廃病院の屋上。この病院も目立たない場所とはいえ、町の中にあるから、遠いというわけでは無い。けど、この場所は少年と同じで、何とも繋がりを持たないような雰囲気があるのだ。

今はもう既に夜。それまで彼がしていたことなんて何もない。早朝、人気のない――人が全くいない場所を求めて歩いた。そのわずかな時間だけ行動をした。あとは、この病院に戻ってきて、何もしていなかった。

昨日は公園に行ったな、と少年は思い出す。思い出すというのも少し変だが、思い出す必要があるくらい、昨日の記憶があいまいだった。関心がないから。

またあの公園に行くかどうか、悩むまでもなかった。これからはいかない。

あの場所のあの時間帯。今まで誰とも合わなかった小さな公園。その孤立空間が、昨日壊された。今日もあの女の子がいるとは思えなかったが、彼は可能性があるのなら近づきたくなかった。

少年はその場に立っているだけ、寝ようとはしない。いや、できない。眠気を感じないからだ。眠れないのだ。それに寝転がってしまうと、いけないのだ。

別に彼は疲れすらも感じない。まぁ疲れるほどのことをしていないということもあるのだが……。

と、外が少し騒がしい気がした。少年は屋上の端に行き、下を見

下ろしてみる。三人くらいの学生がたむろっていた。
「はぁ……」
夏になれば肝試しなどで人がたまに来るが、この冬の時期のこんな場所に来るやつは今までいなかった。
そういう時は決まってあの小さな公園に行っていた。そして今も行かなくてはいけないのかと思ったら、少年はため息を吐いた。
とにかくしばらくここで待っていてみよう、そうすればどこかに行くかもしれないから、と結論付けた少年はしばらくその場に立っていることにした。
「……ねぇよな。最近いい相手もいないしヨォ。どうするゥ？」
いかにもチャラついてるという感じの男の声が聞こえてくる。しゃべっている内容も不良じみていて、ケンカのことを連想させる。
「仕方ねぇだろ、強い相手なんかいねぇんだし……いたとしてもお前が殺しちまうだけだろ」
もう一人、男の声が聞こえる。こっちはさっきの男と比べるとまだましだ。少し悪ぶってるだけの学生という感じ。
「殺すのが楽しいんだヨォ。戦うのが楽しいんじゃねェ、滅多打ちにするのが楽しいんだ」
少年の場所からはその男の表情は見えなかったが、口調が楽しんでいるような感じがしたので、おそらく男は笑っているのだろうと少年は推測した。
「本気で力が使えればいいってか？　エンジョイしてんな、お前」
「そゥでもねェな。、相手がいねぇ。お前は最近どうなんだァ？」
「いや、俺も別にエンジョイはしてねぇな……。お前と違って俺は弱いからなぁ」
「お前が弱いんじゃねェよ。お前はつぇェんだ、人としてな」
「おぉ、ずいぶんといいこと言うじゃねぇか。ケンカなんかの力より、現実を見てる俺の方が強いってことか？」
「まるで俺が現実を見れてねェみてェな物言いだなァ……」
あきれたようなチャラついた男は言う。

「まぁ、否定はしねェけどな」
と、自分で肯定する。
「お前は一応マットウな学生だからなァ、俺なんかといる以外は」
またチャラついた男の声。二人の男の声しか聞こえない、二人しかいないのだろうか。少年の立ち位置からはよく見えないので推測することしかできない。
「まぁ、そういわれりゃそうなんだけど、つまらないんだよ。ただ勉強して、下校してバイトして……それだけだからな」
「お前カノジョいただろォ？」
「まだ勘違いしてんのか？　あれはただの幼馴染だ」
「はたから見たらジューブンそう見えんだよ」
「俺がリア充になったら地殻変動が起きるどころじゃすまねぇよ」
「ダイジョォブだ。俺が地殻変動起こしてやる」
（……いったい何の話だこれは？）
途中から何かわけのわからない話になってきたので少年はすこし動揺する。彼はこういった中二病的な会話を知らないのだ。
「お前は本当にやりかねないから止めてくれ」
「お前がリア充にならなきゃなァ？」
「だからならねぇって。……なんか腹減ったな、コンビニ行こうぜ」
まだましな学生――こういうのは失礼だが、少年はそういうことはわからない――がそう言った。
チャラついた男はああ、と相づちを打って立ち上がったようだ。そして気配が遠ざかっていく。病院内には入ってこなかったようだ。
少年は下を見ていた顔を上げて、また空を見た。
周りの明かりがあまりないおかげで星がよく見える。この綺麗な星空は、少年を余計孤立させた。空にすら突き放されていた。……いや、空をも突き放した。この少年が。

孤独の事実

昨日と変わらない綺麗な星空。今日も彼は一人だ。
真っ黒な空に輝く星、時折空を横切る黒い鳥の影、飛行機のランプの光。いろいろなものが見えているのに、彼の目には何も映っていない。悲しいほどに、無関心だ。
病院の屋上、静寂の空間。車の走る音も、鳥の羽ばたく音も、虫の鳴く声も、全部が取り払われた無音の空間。彼は、そこにいて、どうするかを考えていた。
（このままここにいても、多分意味がなくなるだろうな。どうすればいいんだろう）
彼がそう考え付いたのは、昨日不良が来たことが関係している。昨日は入ってこなかったとはいえ、ほかにもあういう輩が来るかもしれないし、第一、ここは見た目同様、かなり不安定で崩壊しそうなくらいなのだ。
（ほかの場所に行くにしても……心当たりはないし）
彼はどうしようかと悩むが今は夜、深夜だ。今なら外に出ている人も少ないので、歩いてほかの居場所を探すことにする。
今日は不良は来ていないので普通に歩いて病院を出る。もし今日も来ていたら彼はここで歩き出すということをしなかっただろう。
病院を出てすぐ、二、三分歩いたところに交番がある。それのせいで彼は見事に……
「君、名前は？　家はどこにあるの？　なんでこんな時間に出歩いてるの？」
警察に見つかった。見つかった経緯はとてつもなく簡単だった。病院を出る、歩き出す、自転車に乗った警察に見つかる。と言った至極簡単、単純な理由だった。
「時間が時間だからね、補導ってことになっちゃうんだけど」
警察官は優しそうな顔をした三十代ほどの男性だった。

見た目の通り警察官の口調は優しいものだった。この人の人柄なのか、相手が――見た目は――小さい子供だからなのかはわからないが、とりあえずこれも仕事だ。彼にも理解できる。
「……」
彼は無言のまま歩き出した。警察官ガン無視である。
「ちょっと君っ――」
と、警察官があわてたように彼にむかって手を出す。彼はちょうど警察官の真横を通るところだったので警察官はすぐに彼の手首をつかむことができる……はずだった。
「……？」
警察官の彼に向かって伸ばした手は、空中をつかんだだけだった。何も不思議なことはない。彼は避けたのだ、その手を。
警察官が後ろを向くと少年の背中が見える。何事もなかったかのように歩いている。
「ちょっと君っ、まちなさい！」
警官が自転車を置いたまま彼に向かって駆けてゆく。そしてもう一度手首をつかもうとする。
だがこれまたよけられてしまう。というか、手首をつかんで無理やり事情を聞こうというのはどうなのだろう。
今度は警官が彼の前に回り込み、話しかける。
「さっきも言ったけど、補導時間過ぎてるから、話をね？」
彼は横にずれて警官のわきを抜けていこうとする。すると警官も彼に合わせて横にずれる。今度は反対側にずれるが、警官も同じくずれる。その繰り返しになってしまった。
さすがに目の前に立たれてこうされてしまうとどうしよもない。
「……あの、そこ通りたいんですけど」
少年が口を開いた。足を止めて真っ直ぐ警官の目を見ている。
「だから補導時間だって言ってるじゃない。だから――」
「すみませんっ、その子知り合いです！」
と、いきなりそんな声が。これには警官も彼ももちろん振り向か

なくてはいけない。反射だ。
そして二人が振り返った先にいた人は、一人の女の子だった。
「その子知り合いなんで、連れてきます！」
そういうとその女の子――先日自己紹介だけした夜の公園の女の子――は彼の手を取ろうとする。先ほどのことからもわかる通り、彼は当然避けた。
……何か気まずい沈黙。
彼はそんなの気にせずに歩き出そうとする。
「君さ、無視されてるけど、ほんとに知り合い？」
警官が訊いてくる。それもそうだろ、あの対応で友人とか知り合い関係の間柄だとは到底思えない。なんといっても無視なのだから。
「はいもちろん知り合いです！　あの子すこし照れ屋で、いやものすごく照れ屋で、二人の時は甘えてくるんですけど人前だとああいう冷たい態度になっちゃう子なんです」
何か設定が追加されたが、彼はそれを知らない。二人の会話を無視して歩いていく。
と、そのことにやっと気付いたのか女の子――春川透音はあわてて彼のことを呼ぼうとする。
「なんで先に行くのぉ！　……」
そこから何も言わない。まぁ言えないだろう、何せ彼女は彼の名前を知らないんだから。
「というか、君も中学生だよね？」
「え？　あ、はい……あっ」
と、そこで透音は気づいた。自分も中学生なのだからこんな時間に外を出歩いていたら補導されるということを。さらに、自分から警察官の前に現れたことを思い出し、なぜか恥ずかしくなる。
「えーと、失礼しましたっ！」
透音は勢いよく走りだす。そのまま彼に向かって突き進んでいき、その手を取って走り出す……予定だった。
「……なんで避けるの！？」

彼は避けた。振り払うのではなく避けた。まるでこうされると予想できていたかのように。
そして彼は体の方向を変え、今歩いてきた道を戻ろうとする。
（こんなんじゃ、時間が無くなるだけだ。また今度にしよう）
だが当然、来た道を戻るということは警官がいる方に歩いていくことになる。そして当然のように呼び止められるわけだ。
「こっちは仕事だから、ちゃんと答えてくれないと困るんだよ」
「……」
それでも彼は無視する。さすがにここまで完璧に無視だと警官も怒るだろう。
「君はからかってるのか！？　いい加減にしろ！！」
怒鳴る。後ろで透音がビクッ、と反応しているが、彼は無関係だというかのように通り過ぎる。警官も固まってしまう。というか、透音が半泣きだ。自分が怒鳴られたわけでもないのに半泣き状態。強い口調が苦手なのだろう。
と、透音が走り出した。
「あっ、こら待て！」
警官は追いかけ始める。彼の方はどうするか迷った末に、ほっておくという選択肢を選んだ。会話が成り立たない相手より、せめて会話できる相手の方がいいと考えたのだろう。
彼はゆっくりと歩いてたち去っていく。
（なんで仕事だとかいう理由で足止めされなきゃならないんだよ）
彼は言葉には出さないけど、心の中ではいろんなことを思っている。それを誰かに伝えようとはせず、独り胸の中に……。
誰ともしゃべりたくない、彼はそう思っている。だからと言って、人間不信というわけでもない。信じたことがあるかと問われればないと答えるしかないが、信用していないから近づかないわけじゃない。孤独にしてしまうからだ。
彼が歩き出そうとすると、後ろからタッタッ、と足音が聞こえてくる。走っているような早いリズムだ。だが当然彼は振り返らない。

歩いている人がいても、走っている人がいても、触れなければいいのだから。
「逃げてぇぇぇぇぇぇ！」
と、後ろから叫び声。これは誰に向かって言っているのか、そんなことはどうでもいい。声に聞き覚えがあり、なおかつそれが自分を気にかけている相手であれば振り向く。
彼は警官と透音が消えた道の先を見つめる。
「はしってぇぇぇぇぇぇ！」
透音が走ってきた。後ろには警官が迫ってきている。追いかけているのが警官でなかったら大変なことになっているだろう。
とりあえず、その声が自分に向けられていることが分かった彼は……無視した。
透音は走っている、自分は止まっている。だからそのまま通り過ぎるだろうと考えたのだ。
……。警官と鬼ごっこをする透音を見て、彼は……何も思わない。
二つの影が彼に向かってくる。彼は横にずれて、道を開けるようにする。だんだん近づいてくる。タッタッタ、っと走る音が聞こえ、彼の横を通り過ぎる……直前。それが彼の真横で不意に止まる。前を走っていた透音だ。そしてブレーキをかけて止めた足を横に出す。彼の前にかがんで、隠れるようになる。
当然、そんなことをして隠れられるわけもなく、警官もそこで足を止める。
「……いい加減にしてくれないかなっ、そろそろ起こるよっ」
今でも結構不機嫌そうだが、彼はやはり気にしない。だが、彼の頭では……
（……困った。挟まれたみたいだ）
困っていた。なぜ？　二人に挟まれたからだ。一人なら問題ないが、二人いるとどちらかに捕まってしまうかもしれない。触れてしまうかもしれない。だから彼は困っている。

と、目の前で透音が彼に近づく。彼は避ける。
そして……
「あっ、待ってよぉ！」
彼は走りだした。普通に歩いている通行人なら複数人いても問題ないが、明らかに自分を狙っている相手が二人いると少し難しくなる。だから彼は走り出した。
ただ、彼の足は速い方ではない。こうやって走ることがないからだ、慣れてない。
それに比べて……。
「いきなり逃げるなんてひどいっ！」
透音は速かった。女子としては珍しいほどに早かった。
そして警官も、そこは大人と子供の差であろうが、早かった。ただ、透音の方が速い。透音が逃げることができていた理由がよくわかる。
だが問題は彼だった。このままだと、すぐに追いつかれてしまう。
（このまま帰ろう）
彼はその結論に達した。廃病院に帰ろうと。警官は追ってくるかもしれないが、あそこは光が全くないので彼はうまく逃げれるだろうと思ったのだ。
病院と交番の距離はほとんどない。徒歩二分だ。
彼は病院の前に着くとすぐに病院内へと向きを変える。
「なんでこんなところに行くの？」
透音が訊いてくる。
（なんでついてくるんだよ……）
彼はそう思いながらも無視。これしか選択肢はない。
「ねぇ……」
透音が彼の肩に触れそうになる。それを彼は避ける。警官がライトを使ったのが分かった。補導でここまでするのは珍しいというか、彼相手でなければいりえないだろう。
「だからなんで避けるの！？」

なぜと言われても彼は無視する。明らかに自分に対する言葉でも彼は無視を決め込んでいる。
彼は病院の階段は上がらず、一階の廊下を走る。そして少し離れた部屋に入る。扉はなくなっているので素直に入る。
そして彼はそのまま走って、窓ガラスがなくなった窓に飛び込む。
「えぇ！？」
彼のその姿に驚く透音。彼はハードルを飛び越えるかのように窓をくぐったのだ。彼と窓枠との接触面は無い。見事だった。
そして彼はそのまま病院の外へ。これで警官は撒けるだろう、と思った。
ただ、この後ろについてくる彼女だけは撒けていない。
「なんかすごい面白かったね！」
とても楽しんでいた。先ほど警官の怒鳴り声を聞いて涙目になっていたのと同一人物だと思えないくらい楽しんで笑っていた。感情の変化がすごい。
「そういえば、君の名前、教えてよ！　あたしはもう言ったでしょ？」
彼女は笑顔で聞いてくる。学習すればもうわかることだが、彼は無視する。
しかし彼女はあきらめない。彼の目の前に行き、改めて言う。
「あなたの名前は？」
彼の目を覗き込みながら聞いてくる。透音の顔を真正面からドアップで見ると、普通の男子は焦って頬を染めたりするが、彼は全く動じない。見つめ返すだけだ。
透音の綺麗に整った美少女とも呼ぶべき容姿は、彼に全く効果がない。
「……邪魔」
彼はそこをどけと目で語っていた。そして言葉も使った。
だがなぜか彼女は笑った。
「名前を教えてくれたら通してあげるよ」

彼は笑顔の透音の顔を見つめる、睨み付ける。
そして彼は言った。仕方なく、返答することにした。
日常から離れているという彼の事実を突き付けるように。睨みながら一言だけ発した。

「名前はない」

孤独の言葉

彼の言葉に透音は反射的に答えた。
「もしかして自分の名前を語りたくないの？　過去に何かあった？　もしかして……家族に何かがあって、それが解決するまで家族にもらった自分の名前を口にしないっていう誓いをしたとか！？　それとも反抗期？　親からもらった名前なんていらないっていうアピール？」
透音が彼のその返答を読んでいたかのように早口に言葉を発するものだから、彼は歩き出す。話が通じないと思ったようだ。
「え！？　ちょっと待ってよ！　あたしは当然の反応をしたと思うよ！！」
また透音が彼の前に回り込む。彼はもう一度透音を睨み、言う。
「どいてくれ」
「いや」
一瞬で拒否の言葉が返ってきた。これも予想していたかのような反応速度だ。
「名前教えてくれないとどかない」
「名前はない」
「嘘。誰にだって名前はある、どんな人にだって」
「ない」
「ある」
二人とももものすごい勢いでお互いの言葉を否定しているが、話は一向に前に進まない。
「……そんなに名前を言いたくないの？」
透音が不思議そうに聞いてくる。彼はそれを無視。もう話が通じないと思ったからだ。
彼が言った言葉に、嘘はない。彼の名は本当にない。なぜか、それは彼も知らない。ただ、自分がそういう存在であることはずっと

前からわかっている。
「ねぇったら！」
彼は無視。彼でなくともここまでしつこいと無視するだろう。ただ彼はずっと無視し続けているが。会話はこの二人の間には存在しないのだろう。
だから彼はもう一度だけ言ってやる。
「名前はない」
たった一言だけ、会話をしないために黙らせるためだけの言葉。
そういうと、よりきつく透音を睨み付ける。先ほど警官の怒鳴り声にビビッていたから、これくらいでひるんでしまう。
「そ、そんなに言うのが嫌ならあたしが名前付けちゃうよ？」
「……」
彼はそんなこと興味もない。無言。そうすると透音は無言を肯定とうけとったのか、それとも一方的にしゃべってしまった方がいいと思ったのか、唇に人差し指を当てて思案し始めた。
ここで彼がとる行動はいたって簡単。徒歩。歩き出す。
「あっ、ちょっと待ってよ！　せっかく名前考えてあげてるのに！」
透音が勝手に考えようとしているだけだが、透音自身、目の前の彼が頼んだかのように認識しているような口ぶりだ。
「あっ、そうだ！　いいの思いついた！」
と、透音はそういうとさっきの怒った顔とは反対に、明るい笑顔を浮かべて目の前にいる彼の顔を覗き込む。
「君の名前はねぇ……」
と、笑顔を向けながら透音は言った。
「レイ、っていうのどう？」
と、どこかで聞いたことがある名前を提案する透音。
「あっ、これは別に他意はなくて、冷静とか、冷酷とか、冷たいっていう字を取ってレイっていう名前にしたの」
透音はそういうが、彼――透音にレイと名付けられた少年は興味も関心も何もないので無視。

すると透音はぶっちょう面になってふてくされながらレイに向かって文句を言う。
「……そんなに無視しなくてもいいのに……。なんでそんなに無視決め込んでるの……？」
透音の質問にもレイは答えない。
透音はさらに不機嫌になって彼の額に手を近づけて、デコピンをしようとする。
だが、レイは当然それを避ける。
「そんなに嫌なの？　誰かと話したり、触られたりするの」
レイは無視をするから、透音が一人でしゃべる形になる。
「そういうのって、辛くならない？　もちろんあたしだって……されたった方だって嫌だけど、する方だって嫌なんじゃない？　そうやって、コミュニケーション取らないのは、なんかちょっと……悲しいよ」
透音のつぶやきのような最後の一言、その一言は透音まで悲しそうな顔で、そう言った。
「……別に」
透音のその一言が、その一言で、レイは言葉を発した。
（……別に話しをしても問題ない、嫌われればいいだけだ）
彼は人知れず心の中で、そんなとてつもなく悲しいことを思いながら透音の瞳を見た。
「お前みたいな奴、うっとうしいだけ」
感情がこもっていない口調で、何も思っていないかのような無表情で、レイは彼女に言った。
でも、それで会話は終わらない。一度始まった会話はすぐには終わらない。
「レイはそう思ってるんだね。……でも、あたしは悲しいよ」
「お前はどうでもいい」
冷たい冷え切った言葉。彼はそんな冷たい言葉を発する。
「レイにとってはあたしはどうでもいいのかもね。けど、あたしに

とってはレイはどうでもよくない人なんだよ？」
「俺はレイじゃない」
レイ――彼は自分につけてもらった名を捨てる。否定する。
でも、名付け親の透音は、
「レイは、誰かの気持ちって、考えたことある？」
レイ、と呼んだ。否定されたのにもかかわらず、レイと呼んだ。
悪いはこれっぽっちも感じ取れない、純粋な言葉が、声が続けられる。
「他人はね、自分が当然だと思っていることもできなかったりするの。それに自分がすごいと思ったことを当然だと相手は思ってることも。だからね、他人であるあたしは、今こうやってレイに……あって間もない人に無視されただけで、悲しくなっちゃうんだよ？」
そう、透音は説明した。それが彼の心に届くわけはないけど。
「お前、ほかにもいるだろ」
「……何が？」
透音は質問したが、彼は答えなかった。また、無視した。し始めた。
だから透音は自分で今の言葉は何のことを言っているのか当てなくてはならない。
無視されただけで悲しい気持ちになる人はほかにもいるという意味だろうか、それともその前に言った誰かの気持ちを考えたことがあるか、という問いに対する言葉だろうか。いや、それはない、会話として成り立たない。と、透音は自分の中で考える。
そして透音は、一言、彼の目を見ながら言った。
「いるよ」
そう、透音は言った。
何が『いる』という意味なのかは発言者である透音にしかわからない。けど、彼の質問の方の『いる』は何を指しているのか、質問者の彼にしかわからない。ゆえに、この会話がちゃんと成り立っているのかは誰一人としてわからない。

彼は、また、無視せずに言葉を発する。
「……なら……」
彼はゆっくりと歩いて、透音の横を通りすぎる。
透音は彼のその姿を目で追う。少し透音から離れた位置まで歩いた彼は、歩みを止め、透音の方に顔だけ向ける。無感情な瞳で、透音を見る。
透音も彼のことをみる、街灯と夜空を背景にして。
そして彼は、透音に向かって一言だけ、最後に言った。
「俺に触るな」
透音に向かって彼は、明確な拒絶を言葉にした。

孤独の近く

彼はあの後、あとを追ってこない透音のおかげで廃病院に帰ることができた。

透音は、また彼に会いに来るだろうか？　あそこまで明確な拒絶を言葉にされたというのに、また性懲りもなく彼に会いに、探しに来るだろうか。

……普通の人間ならば、こんな冷たい奴とはかかわりたくないと思うだろう。

ただ、透音はどうなのか。わからなかった。

普通の女の子のようで、どこか普通の女の子とは違うおかしな発言をしたり、あんな時間に外を出歩いていたり、その理由が自己紹介すら無視した少年を探すためだったりと、透音の言動はつかみどころがないのだ。

しかし、彼はそんなこと気にもせず、早朝の朝日に照らされながら廃病院の屋上から町を見渡していた。理由はいつもと同じ、特にこれと言ってない。

彼はもう、昨日の出来事なんか気にも留めていなかった。それどころか、もう忘れ始めていた。どうでもいいことだったから。

でも、彼は忘れることなんかできない、彼女のことは。

こんなに毎日出会っていては。

「やっぱりここにいたんだね、レイ」

また、彼女はレイと呼んだ。

彼は微動だにせず朝日に照らされながら町を見ている。真正面から直射日光だろうが目を細めたりしていない。必要ないから。

透音は彼の立っている方向に太陽があるせいで少し目を細めながらレイに近づく。

「家には、帰らなかったの？」

透音は彼に問いかける。

彼は意味のない問いには答えない。
彼にとって意味のある問いとは何か、それはどういう問いなのか、それはやはり彼にしかわからない。けど、彼はそんなことは話さないだろう。
「お母さんとかが心配してるんじゃない？」
透音は返答を待たずに質問をかぶせる。
その問いも、彼は答えない。無論、答える必要性がないから。必然性が。
彼は透音の方を向く。そのまま無言、沈黙が続く。
透音は彼の回答を待って、彼は透音がそこからいなくなるのを待って。
お互いが待っている。相手が動くのを、答えるのを。
朝日に照らされてロマンチックな街並みを背景にしながらも、この場所と今のこの空気がまるで、隔離された別世界のような錯覚をさせる。
学校指定の制服に身を包んだ透音は、朝の肌寒い空気を防ぐためにマフラーに顔をうずめる。
二人とも、自分から何かをする気はない。
今の時刻は六時ジャスト。タイムリミットはある。
透音は学生だから制服を着ているのだ。つまり今日は学問に励まなくてはいけないということ。学校に登校し、授業を受けなくてはいけないということ。
彼はそれまで無言を貫き通していればいいだけなのだ。そして透音が去った後、どこか透音に見つからない場所に移動すればいい。
だが、あっさりと、透音はそれを否定した。
「今日は秋休みだから学校には行かないよ。だからタイムリミットなんてないからね」
彼はその言葉を聞いて、何かアクションを起こすわけでもなく、ただ無言を貫き通す。
小さな風に、透音のセミロングの髪がなびく。この季節にふさわ

しい冷たい風が。
太陽はさっきのような水平線上に見えるのではなく、すこし上に上がっていた。
彼は、答えない。理由はある、簡単なことだ。
名前がない、夜中にたった一人で廃病院にいるまだ幼い少年。なぜそんな風にしているか、名前がないのか。それを察したのか、透音は言った。
「……もしかして……いないの？」
そう、簡単なことだ。
名前がないのはなぜか、名付けてくれる親がいないから。
家に帰らないのはなぜか、単純な話だ。家に帰らないのではない、帰れないのだ。家がないから。居場所がこの廃病院しかないから。
いや、彼に本当の居場所など存在しない。誰も、どこであっても彼を受け入れることはできないから。
彼は何も答えず、表情一つ変えない。
「もしかして……無視するのは、寂しくなるから？」
誰かと繋がることができるなら、それまでため込んできた孤独の辛さを捨てることができる。
つらかったことを捨てるために相手に甘えてしまう。寂しさが一度ぶり返してくる。
過去の寂しさを、相手と分け合ってしまうから。
だから彼は透音とちゃんとした会話もしようとはしないし、好かれようとも、つながりを持とうともしないのだと、透音は思ったのだ。
（……くだらない）
だが、それは透音の考え、彼の気持ちではない。
彼は微塵もそんな寂しいなどと考えたことはない。
ただ彼がいつも考えていること、思っていることはただ一つ……
（……誰にも触れなければそれでいい）
それだけだった。

理由は、至極簡単。単純なことだ。……ただ、透音はその事情を知らない。だから彼に付きまとおうとする。彼にとってそれはただのお節介にもならない、迷惑以外の何物でもない。
「……じゃあ、今日は一緒に居てあげるよ」
そんな彼の気も知らずに、透音はそう言って彼に近づいていく。
だが、今日は透音は彼に触れようとはしなかった。彼事を少しだが理解した？
……いや、違う。触れようとすれば、また彼は逃げて行ってしまう。それを避けるためだ。
透音の足ならば簡単に彼が逃げても追いつけるが、そんなことを繰り返していたら彼は永遠に透音に心を開いてはくれない、そう思ったのだ。
だから、黙って彼のそばにいればいいと、透音は思ったのだ。
「……」
彼は透音を横目で見てまた街並みに視線を戻す。
彼は、自分に触れてこない、害がないものならば気にはしない。
「いつも、ここにいるの？」
ただ、透音は話しかけては来る。意味のない日常的な会話。彼はそんな無意味な値もない会話には参加しない。ただ、答えるとするなら、ＹＥＳだ。
「ここは、何か特別な場所なの？」
だから透音は一人でしゃべり続ける。
答えは返ってこないとわかっていながら透音は言葉を止めない。
「親戚の人とかはいないの？」
質問攻めにする。返答はないけど、すべてが疑問形の質問だ。
彼は孤独だ。たった一人、家族も、親戚も、親族は一人たりとも存在しない。
透音は屋上に続く階段のすぐ近くに腰を下ろす。彼は、階段を下りることができる。
……でも、彼はそこから動かない。

「友達はいないの？」
誰一人として彼にかかわることは許されない。関われば、彼の孤独を広げるだけになる。
彼にかかわれば、その人本人がではない、その人の周りの人を、家族を、友達を、今の彼と同じ、たった一人の孤独な状態にしてしまう。
彼は透音の方ではなく病院の下を見下ろす。
何があるというわけでは無い。確認だ。何かがあっては、何かがいてはいけないから。
これ以上この場所に誰かが来てはいけないから。
「好きな女の子も？」
繋がりはない。そんなに思いの深い人は作れない。作ろうとはしない。
仮に、彼が誰かとかかわりを持ってしまっても、それはちょっとしたことで崩れてしまう。
彼と、触れあってしまえばそこまで。
だから彼は誰ともかかわらずに見ていることだけする。自分に近づいてくるものがいないように。常に警戒しながら非日常を過ごす。
彼は誰かと心を通わすことはできない。だからしようとしない。
「好きな動物は？」
彼が何かに好意を寄せるということがあるのだろうか、おそらくないだろう。
何に対しても関心が無い、自分から動こうとはしない。意欲の欠片もない。
それに、感情があるのかさえもあいまいだ。
好き、嫌い、痛い、苦しい、悲しい、辛い、楽しい、面白い。
そんなこと、彼は一度でも思っただろうか。透音に対する心の声はいつも一つ
――……くだらない。
その繋がり自体がくだらない。自分との繋がり自体が。

これも感情ならば、彼は無感情ではないだろう。ほかの感情を持っていないだけで。
感情はあるということになる。
「アニメとか、見る？」
彼は繋がりを持たない。アニメなどを見る方法を知らない、アニメが何のことなのかもわからない。そういうことを教えてもらっていないから。テレビというものを知らないから。
テレビだけではない。ほかの電化製品、電子レンジ、パソコンなど何一つ知らない。
ただそれは電化製品に限られたことではない。食べ物であっても、パンやごはんと言われても何を指しているのかわからないし、食器でもコップやお皿と言われてもどんな形状をした、どのような時に使うものか、彼はわからない。
彼はそんなものに触れたことすらないのだから。
「洋服とか、興味ある？」
そんな質問、するまでもない。興味は何に対してもないのだから。
それに彼の姿を見れば一目瞭然だ。この肌寒くなる季節にもかかわらず彼に姿は半袖Tシャツ、ジーパン。というシンプルすぎる、この季節には合わない服装だ。
彼はこの服を変えることはない。着替えるということはできないから。
「……ホントに、寂しくない？」
同じ質問が飛び出した。寂しくないかという問いが。
「……別に」
彼は、答えた。同じ答えで。
なぜ彼はこの質問には答えるのか、なぜほかの質問には答えないのか。
なぜこの質問は意味があると解釈するのか、ほかの質問は意味がないと解釈するのか。
彼はいったいなんなんだろう。

孤独を寂しくないという少年。
何にも関心を持たない少年。
行動意欲のわかない少年。
人との繋がりを持とうとしない悲しい少年。
彼はなにがしたくて、何を目的として、こんな行動をとっているのだろうか。
透音は、透音の質問は、彼がどのような質問、状況ならば自分と向き合ってくれるか確かめるために続けていたのだが、透音はどうもひっかかった
だから透音は、日が暮れるまで、飽きもせずに彼に質問を投げかけ続けた。

孤独の接触

夕方、というよりあたりはすっかり暗くなっているので夜と言えるが、時刻的にはまだ夕方だった。冬の日が落ちるのは早い。

その時間になっても、透音は廃病院の屋上にいた。

透音は一度も自分の家に戻ってはいない。ずっと廃病院の屋上の片隅に座っていた。

彼は、そんな透音が永遠と繰り出していた質問に口を何度か開いたが、会話と呼べるものはなかった。彼が発する言葉はいつも一単語だけだった。

だが、彼は廃病院の屋上から去ろうとはしなかった。

だから透音は彼がそこにいるのならと、永遠と話しかけ続けたのだ。

「……暗くなってきたね」

他愛もない質問を投げかけ、日常的な会話をしようとする。

「今日も、またどこかに行くの？」

どこかに行く、という言葉がなぜ出てきたのか、彼は理解できない。

どこかに行く気などないのだ、彼は。なのに透音は聞いた。

おそらく透音は、夜中に出歩いていたのを見て、考え付いた答えがそれだったのだろう。こんな夜中に出歩くほど、重要なことが彼にはあったのだと。

透音は彼に話しかけるが、無視が続く。

透音もわかっているのかほんの少し口角を上げる、苦笑だ。

冬の澄んだ星空の下、二人の男女は通じ合えぬままでいた。

いい加減どんな質問が来ても答える必要がないと思ったのだろう。名前の無い少年は透音のいる方――階段の方に向かって歩いていく。

透音には一切目もくれず真横を通り過ぎる。

「……」

透音は無理に引き留めようとはしなかった。透音の方もわかって

いたのだ、このまま引き留めて会話を繰り返したとしても、今の関係が進展するわけがないと。
少年は途中の階で止まることはなくまっすぐに階段を下りていく。
一段一段、ゆっくりと降りていく。彼の体には余計な力はいらない。
一階に到達すると彼はそのまま外に出た。人気の無い病院の駐車場に。
「あ？　なんだこいつ？」
だが、人はいた。前に見たあの不良だ。その不良が少年の目の前に立っている。その少し後ろの方にはその男の仲間の男がもう一人。先日ここにいた二人組だ。
「こんな時間にガキがこんなとこに……？」
彼はそのまま不良男の真横を通り過ぎる。
「おい、無視してんじゃねぇよ」
男が少年の肩をつかもうとする。だが当然少年はいつものように避ける。
もう人の触れようとする手を避けるのには慣れてしまっている彼にとって、あんなにゆっくりとのばされた手は、複数人でない限り避けられないということはない。
だが、その脱力仕切った無駄のない避け方は、目の前にいる不良のような男にとっては、頼っておくのはもったいないものだった。
「へぇ、いい身のこなしだなァ……なぁ、殺らねぇか？」
そう、先日の会話にもあった通り、この男は今ちょうどいいケンカ相手が居なくて退屈していた。そして、少しでも楽しめそうな相手が見つかるなら、それがたとえどんな奴であろうと戦いあいたいというのが男の本音だった。
だが、当然彼はそんな言葉は聞こえていないかのように無視して歩いていく。
「つれねぇ態度とるなよ、まぁ少し待て」
男がそう言いながら指をぱちんと鳴らす――直後。

ゴォ！　という音を立てて少年の行く先をふさぐように、平たい大きな壁ができた。
「ばかッ、いきなりやんじゃねぇよ！！」
慌てたようにもう一人の男が両掌を勢いよく合わせパンッ、という音を鳴らす。
そしてこれまた直後、その男の合わせた手の周りに紫色の四角形の立方体が出現し、それが一瞬で膨張する。そしてその立方体はガラの悪い男と名無しの少年、そしてこの病院を駐車場事包む。
「お前少しおせぇよ、気付かれたらどうすんだ」
「お前がいきなりすぎるんだよ！　合図とか出せ！」
そこで言い合いをする男二人。少年は二人に背を向けたまま微動だにしない。
さっき出現した目の前にある壁は、よく見ると土の塊だった。それが横一直線に続いている。この病院の駐車場の出入り口をふさいでいる。
「まぁ、少し楽しみたいんだ、逃げないでくれ」
ガラの悪い男が歪んだ笑みを見せながらそう言う。
「えーとな、こいつはちょっと欲求不満で、相手してやってほしいんだ。死にはしないけど、もしかしたら内臓破裂とか起きるかもしれないから気負付けて」
まぁ多分今言っても遅いだろうけど、と男は呆れたようにため息を吐く。
「……え？」
男がため息を吐いたのとほぼ同時、男たちの後ろ――病院棟の出口からそのか弱い女の子の声がくらい駐車場に響く。
それを聞いた駐車場にいる少年を除いた二人ははじかれたように振り返る。
「……今日は肝試しでもしてたのかァ？　ガキが二人も……あ？　恋人かァ？　今時のガキはお熱いじゃねぇの」
ガラの悪い男は透音の方を向きながら笑いながら言う。

「これ、やったのって……。あなたたち、何なんですか……？」
透音が驚いたように男たちに聞く。ガラの悪い男はあぁ？　と聞き返すそぶりを見せてから、
「名前ってことかァ？　【大地の怒り（ガイアフィーリング）】とでも呼んでおけよ」
「直訳すると大地の感覚とかだったと思うけど……。俺の方は……自分で言うのも恥ずかしいんだけど、こいつに付けられた名前が【遮断空間（インターセプト）】っていうんだけど、これも直訳すれば遮断っていう意味だけになるんだよね……」
常識人っぽい方の男は苦笑しながら説明する。
「信じられないかもしれなけど、俺たちって俗に言う能力者だったりするんだよね」
【遮断空間】と名乗った男は丁寧に説明してくれる。
一方、【大地の怒り】と名乗った男は腕を伸ばして軽いストレッチをしていた。どうやら本当に戦う気らしい。透音は本当に？　という信じられないような顔をしていた。そして少年はただ一人無表情でその光景を見ていた。ただ一つ、少年の胸中にあったものは、
（……めんどくさい……）
相変わらずだった。
「じゃあ、楽しませてもらおうかなァ」
【大地の怒り】は歪んだ満面の笑みで少年の方を振り返ると右手を地面につけてそのまま手に力を込める。そしてそのまま地面を握ったまま引き抜く！
男の手には、大きさ三メートルほどの大きな土の塊が握られて――いや、握るという表現ではおかしいか、つかんでいたの方が正しい。
「俺の能力はこういうことができるんだ」
【大地の怒り】はそれから手を離し少年の方に人差し指を向ける。
「いけ」
静かに呟いたのと同時、浮遊していた土の塊が少年に向かって飛んで行った。

少年は後ろに下がるわけにもいかず、いつも通りのゆっくりした歩調でその土塊に向かって歩いていく。そしてそのまま歩みを止めずに少し右にずれながら体をひねり、軽々とその土塊を避けて見せた。

後ろにある土塊の壁にそれがぶち当たり、飛散する。

「面白れェ！　こんな現実離れしたものを見せられてそこまで冷静でいられるってェのは相当なもんだ！　面白れェよ！！」

男は右手首だけを使い、手を下から上へと上げる。手招きの手のひらを返したような感じだ。

それに連動したように男の目の前の地面が駐車場のコンクリートごと持ち上がり、さっきと同じように土塊が出現する。今度は三ついっぺんに。

「今度は避けれるかなァ！？」

楽しそうに笑いながら手を上に上げ、一気に振り下ろす。

三つの土塊が同時に少年に迫る。だがそれでも少年は身じろぎひとつせずにその迫りくる土塊を見つめる。そしてまた少し横にずれる。一つ目はすぐ真横を通り過ぎ、二つ目が目と鼻の先にある。体をひねり回転しながらそれを躱し、最後の一つをもう一度ひねりながらターンしてかわす。三つすべてを躱しきる。

「ははははッ！　久々だ！　こんなにいい獲物は！！　ほら！　まだ行くぞ！　次は後ろだ！」

男の声に従って少年は後ろを振り返る。そこには先ほど土塊の壁に当たって砕けた土の小さな塊が浮遊していた。そしてその浮遊がピタッ、と止まった瞬間――！

マシンガンの弾のようにそれは少年に向かって高速で飛んでいく。そんなものがこれほど無数に飛んで来れば、かわすことなどできない。

だが彼は、そのマシンガンの散弾を見つめながら回転しながらそれを避ける。

「はァ！！！？？？？」

さすがの男もこれには驚かずにはいられなかった。なぜなら、彼が避けているこの光景はあり得ないことだったからだ。
土の散弾の大きさは一センチもないが、それが無数に飛んでくる。散弾同士の幅はどう考えても人が存在できるスペースなど確保できていない。それなのに――
少年は動きを止め、ゆっくりと振り返る。
少年の体には、傷どころか、服に土埃すらついていなかったのだ。
「どォいうことだ！　どうやって避けた！？」
【大地の怒り】の叫びにも、少年は答えない。その代わりに一言。
「……もう、消させないでくれ」
うつむきながら掻き消えてしまいそうな声で言った少年に対して男たちは言葉をなくし、今まで呆然と見ていた透音もそのままだった。
【大地の怒り】は一瞬で覚醒し、冷静な口調に戻る。
「まぁ、いい。所詮土だからな、あり得なくはないだろうなァ。……だったら今度は……」
男は今度は左手の平を手前に向けて、また土塊を地面から切り出す。
「こうやって硬度を高めて刃物にすればいい」
男はその土塊を圧縮するようにしながら削り、形を変えて行く。そしてそこに現れたのは土でできた十本ほどのナイフだった。
男がそれを一本手に取り自分のポケットから財布を取りだし十円の銅貨を指ではじく。そして落ちてきたそれを横に切る！
十円はそのまま地面に落ちた――瞬間。綺麗に真っ二つに切れた。
「完成だ。これなら問題ない。さぁやろう」
「……や、止めて！　こんなことしたら近所の人に気付かれるしっ、レイがもう止めてって言ってるんだから！」
やっと我に返ったらしい透音が男に向かって叫ぶ。
それに答えたのは【大地の怒り】ではなく【遮断空間】だった。
「別にその辺は心配しないでいいよ。俺の【遮断空間】のおかげで

外にばれることはないから。俺の能力は『結界外の者は結界内への侵入をを全く受け付けない』プラス『結界内の映像を見る、聞くことはできない』っていうのがあるから。それに、あいつは殺しはしないと思うよ。今までも重傷にはしたけど殺してなかったし。……まぁ、今回は例外かもね」

【遮断空間】は微笑みながら透音に言う。

「まぁ、そォいうこったァ。説明終了バトル再開だ！」

【大地の怒り】が握っていた土性のナイフを投げる。それに続いて浮いていた九本のナイフも一斉に飛んでいく。

少年はそれが飛んできたのを見たが、また横にずれるだけだ。今回は先ほどの散弾とは違って本人が投げたスピードなのでそんなに速くない。横に数歩歩いた後跳ぶ。簡単によけれる。

「……当たんなきゃしょうがねぇもんな……」

【大地の怒り】は手を上に上げて少年の頭上五メートルほどに土を集め、五メートルほどの土塊を作り上げる。そしてそれを落下させる。

「上だけじゃねェよ」

男はそういうと少年の周辺の地面から土を噴出させ少年を包み込もうとする。

「切断じゃなくて圧死っていう方が俺の能力は向いてるなァ」

上からも下からも来る攻撃を避けるには横に跳ぶしかない。だが、下から噴き出た土はもう既に少年の腹部を超え胸部に到達していた。回避は不可能だった。

――透音があわてて何かを詠唱し始める。日本語だ。口が動いているが何を言っているのかわからない。声はここまで聞こえない。

ほぼ同時。噴出した土が少年を包み込み、落下した土塊が少年を潰す。

孤独の力

「え！？」

そう驚き声を真っ先に発したのは透音だった。

少年に向かっていた土塊や噴出された地面は少年に触れた。確かに触れたはずなんだ。それなのに、彼は傷一つついていなかった。またしても土埃すら見当たらない。

言うまでもないが四方から噴き出した土の波はどの方向によけようとしても避けられるものではなかったし、頭上からは大きな土塊が落下してきていた。それにもかかわらず、彼は平然とその場に立ち尽くしていた。

「なんで、だ……！？」

【大地の怒り】は驚愕に目を見開いたまま、少年に向かって言葉を発する。

「お前、能力者か！？　俺の操った土をどこかに転送したのか！？」

この男には、少年が自分の攻撃を避けたということは考えられなかった。いや、この場にいるだれもがそれを考えることなどできなかったのだ。だから透音も驚いた。

透音自身、少年を助けようと何かをしようとしていたが、それは間に合わなかったはずなのだ。いや、仮に間に合っていてもこんな状況になるはずがない。

だから彼は自分の力でこの状況を打破して見せたのだ。ただ、その方法が分からなかったんだ。避けたわけじゃない。彼は一歩も動いてない。だが確実に【大地の怒り】による攻撃を避けている。

「何をしたんだァ！？　テメェ！」

男は少年に向かってもう一度土流をたたきつけようとする。だが、そんな単発の攻撃をバカみたいに受けるはずもなく少年は避けて見せる。

何度か同じように土塊や土粒を少年に向かわせるが、ことごとく

避けられる。少年は動き回りながら必死になって攻撃を避け続けた。
だが、少年は一歩も動かずに攻撃を回避することができるはずだ。にもかかわらず、なぜ動き回り避ける必要があるのだろうか。
「なんで避ける！！　テメェは能力使って戦えんだろ！？　楽しもうぜ！」
【大地の怒り】は半ば確信し始めていた。だからまた歪んだ笑みを取り戻していた。
避けるなどという面倒事を少年はした。なぜか、簡単な話だ、そうしなければ能力を使えないから、能力を使い切ってしまうから。
もう一度【大地の怒り】が土塊を三つ突進させる。少年は先ほどと同じように無駄のない動きでかわして見せる。
「……なるほど、制限があるみてェだな。回数制なのかそれともタイムラグを発生させるのかはわからねぇが、あまり多様できる能力じゃなねェってことだな。能力の大きさがでかい分反動も大きいってわけか」
男はいったん言葉を切り、笑う。そして勝ち誇ったように続ける。
「それに比べて、俺の能力の制限と言やァ人工物を操ることができないっていう程度だもんなァ。あいつも結界内でしか能力の効果がないってことくらいだ。お前の能力は俺の予想だと、自分降りかかる物理的な攻撃をなかったことにする能力だろうなァ。でも、デメリットがでかいせいで俺たちには絶対に勝てない」
そう男が言うと少年を囲むように地面から土が吹き上がり、それが回転し始める。
「そういう制限があるならなァ。こうすりゃいいんだ」
男はそういうと、その土の竜巻の檻を包むようにさらにいくつもの竜巻を作り出した。
「これを時間差でテメェにぶち当てれば、能力発動ができなくなって終わりだ」
男がそう言いながら竜巻を増やす。だが、竜巻の外にいる透音は一歩も動かず、一言も言葉を発しようとはしなかった。なぜか、透

音はその程度では大丈夫だと思ったのだ。だから自分がここで詠唱を開始する必要もないと。
「さァ、何秒持つかな？」
男は親指と中指を合わせた右手を顔の前まで持ってきて指をパチン、と鳴らした。
瞬間竜巻が中心に向かって小さくなるようにして圧迫し始めた。当然その中にいた少年は竜巻に飲み込まれ、高速回転する土粒や石に切り刻まれミキサーにかけられたかのようにぐちゃぐちゃになるだろう。
竜巻が中心点を圧迫し始めて数秒、誰も動くものはいなかった。
そして、すっかり竜巻も小さくなって残り一枚くらいの土の壁がさらに圧縮されるように中央に向かう。そしてその竜巻が一本の空に向かう柱に見えるような細さまで到達したところで、またしても、それは起こった。
竜巻が、その存在を消滅させたのだ。
別にこれは【大地の怒り】がやったことではない。彼ならば容赦なく土の壁で押しつぶすということをやってのけたであろう。なのに、まだ竜巻は中に人が一人存在できるスペースぎりぎりを保ったまま消滅したのだ。
「……どういうことだ……？　あの量の竜巻を連続でぶつけられて、能力を使ってもそんな余裕は絶対にないはずだ……」
男は、右手をわなわなと震わせながらそうつぶやいた。それを聞いたのか、それとも自ら言葉を発しようと思ったのかはわからないが、少年がうつむいていた顔を上げ、言った。
「触れたら、全部消えるんだ……」
悲しい声で、切ない表情で、少年はそうつぶやいた。
一体どういうことか。それをいち早く理解したのは透音だった。
「……触れたものを、全部消す……？　そんなの、チートじゃない。何の制限も無いっていうなら、本当にチート、無敵そのものじゃない！」

透音は徐々に声を大きくしていった。だってようやく求めていたものが見つかったんだから。こんなにも変わった性格をしていて、強い力を持っている、そんな主人公みたいな人が今目の前にいる。透音はそれだけで興奮を抑えられなかった。

「バカか、そんな能力があったとしても発動する余裕すら与えないほどのスピードで攻撃してれば問題ないだろ。それにこいつは今まで避けてたんだ、それが必要だったってことだ」

冷静さを取り戻しつつも、殺意のこもった目を隠さずにしゃべる【大地の怒り】。

その男に向かって中学生ほどの小さな少年は一言だけ言う。

「もう、消したくないんだ」

その言葉を聞いて透音ははっ、と思った、今までの彼の行動を振り返り。

彼は今までいくら話しかけても一定の質問以外には答えなかった。……いや、そのことじゃない。言葉じゃなく動きの方だ。

彼は透音と出会ってから、ずっと透音に触れられるのを拒否していた。いや、それどころか警官に触れられるのも、さらには彼自身から、何か物質に触れるということもしなかった。窓を走り抜けるときも決して窓には触れなかった。病院の屋上にいても座るということすらしなかった。

そうだったんだ。簡単なことだったんだ、と透音はようやく彼のしようとしていたことを理解した。誰も、何も消したくなかったんだ。

だから、彼は親もいないし家もない。触れて消してしまうのだから。

だが、能力を発動しているときだけ触れなければ問題ない事だろう、という自身の浅はかな考えを透音はすぐに消し去る。そうだ、それができるならしていたはずなのだ。しなかったということはただ単に、できなかったということなのだ。

彼は自分の能力を自由に操ることができていない。常に能力を使

用している状態なのだ。だから触れてしまえば何もかも消し去ってしまう。
彼の能力の制限、欠点、デメリットはそんな能力の扱いにくさと、常に孤独になってしまうという運命そのものだったのではないか、と透音は一瞬にして思考を巡らせ結論に至る。
けど、それならば、もうこの勝負、結果は目に見えている。
もしこのまま男二人組がこの場から逃げ出さなければ、永遠に少年に触れたものは消滅していくだろう。そしてもしも、仮にもしもだ、自分たちが少年に触れられてしまったら、そう考えると、恐怖心が湧き上がってくるのを感じた。全身を冷たい感覚が支配する。
「……何でも消せるのかァ？　だったらやってみろよ！」
男は近くに生えている樹木を操りその葉の落ちかけた枝を彼に向かわせる。
彼は当然避けようとする。だが、男の意志で自在にうねる樹木の枝は、少年を逃がそうとはしない。ホーミングするように少年を追う。
しばらく避け続けた少年はやがてあきらめたのか足を止めた。そのまま動かない。
微動だにしない少年を貫く勢いで枝が迫る。そして少年に枝が触れた――瞬間。
物音ひとつ立てずに少年に触れた枝は、その樹木ごと姿を無に帰した。一瞬でそれまで存在していたはずの樹木も、そこに落ちそうになりながらもついていた葉も、すべてそれまで存在してすらいなかったかのように消滅した。
少年はまたも服に汚れすらつけていない。触れた瞬間すべてを消し去ったのだろうか。それまで接近していた枝が持つ運動量、接触時の衝撃。すべてを消し去ったというのだろうか。
「無理だ……」
【遮断空間】はそうつぶやいた。勢いよく振り返り、その顔を見た【大地の怒り】もあきれたような溜息をつき同意の言葉を発する。

「そォだな。これじゃ俺たちが消えちまうからな」
あっさりと負けを認め勝負を終わらせる二人組。
ゴゴゴ、という音とともに出口をふさいでいた土の壁が沈んでいく。そして指をパチンと鳴らし、周囲に飛び散っていた土を集め、穴のできた地面にはめ込んでいく。次第に地面は元に戻っていく。そして土の壁がなくなると少年は歩き出した。この場が静かになるまでどこか違う場所にでもいようと、静かな場所に居ようと思ったのだ。
少年はそのまま紫色の結界の外に出ようとする。別にこの結界の能力は外から中への侵入を禁止とするという能力だ。逆ならば問題ないのだろうと歩みを進める。仮に無理でも触れた瞬間消えてしまうのだから関係ないだろう。
「おい、ちょっと話を聞け」
と、少年を呼び止める声が響く。【大地の怒り】の声だ。
「そこにいる女は、お前の連れじゃないのか？」
親指で後ろにいる透音のことを示す【大地の怒り】。当然彼はそんなどうでもいいことには言葉を発しない。少年の無言を見て、男は言う。
「まァ、もしこいつのことをほおっておくなら、少し借りたいんだがなァ」
先ほどまでの戦闘狂のような笑みはなく、自嘲気味の苦笑を浮かべて訊いてくる。
透音はえ！？　と驚いていたが、あの無関心な少年がそんなことを気にするはずもなく、歩いて結界の外に出て行ってしまった。もう中には入れない。
「えぇ！？　ひどくない！？　女の子を敵に渡して立ち去る主人公なんて聞いたことないよ！！　レイ！！」
外に言葉は届くはずだが、少年はピクリとも反応を示さず歩いていく。
レイと呼ばれても少年に名前などないのだから反応するはずもな

いのだ。
男二人組に見つめられる透音。まぁ、こういったガラの悪い男に目を附けられたのは運が悪かったとしか言えない。ついでに自分の味方があの少年だけだったということも。
「で、女子。お前と話がしたい」
透音に振り返った【大地の怒り】は笑みを浮かべたまま話す。その笑みがまた透音みたいな女の子にとってはまがまがしく感じられて怖いのだ。
「お前、能力者だろ？　さっきの奴はチートすぎたが、お前も能力者なら戦ってみる価値はある、ってェことだ。……やらねぇか？」
「え、遠慮しておきますっ！」
透音は小走りで出口へと向かう。まぁ、当然そんなことをしても。
「そう言うなって」
地面がゴォ、という音を立ててまた目の前に壁となって盛り上がった。
透音が恐る恐る振り返ると、【大地の怒り】は先ほどの歪んだ笑みを浮かべながら、すでに一つ、土塊を用意していた。

孤独は不戦

好戦的な男をひたすら無視し、さらにその敵ともいえる男のいる戦場に女の子を一人置き去りにしてきた少年は、別にそんなことを後悔したりするはずもなく、むしろそれは当然の行いだとすら思っている。

彼からしたら、あんな戦いの場よりも自分の近くに何かがある、誰かがいることの方がその相手が危険にされされているという意識があるのだ。少年がこんなに言葉を発さない、自分の価値観で必要だと思った言葉以外にはしゃべらないという性格では無ければそれなりの言葉をあそこに置いてきた少女に向かってそんな風に自分の考えを口にすることもあっただろう。

街灯に照らされただけの暗い道を歩いている少年はうつむいたまま、病院の方を振り向きもせずに行くあてもなく歩き続ける。騒ぎが落ち着くまでこのままさ迷い歩き、あの廃病院での騒ぎが収まったらまたそこで誰とも繋がりを持たずに、誰かに見つかることなく隠れていよう。心の中ではいろいろなことを考えている少年だが、それを表情や言葉を用いて他人に向かって表現しようとは思わない。だって彼は誰とも繋がりを持たないことだけが、目的なはずだからだ。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

甲高い女の子特有の叫び声をあげながら迫りくる土塊から逃げ続ける透音。その光景は戦っているというより、意志を持たないはずの土塊――大地に遊ばれているかのようだ。

「……」

男はむすっとした表情で透音のことを睨む。いまだ土塊と追いかけっこを繰り広げている透音に対して不満を抱いているのだろう。男――【大地の怒り】の予想では目の前の少女は何らかのい能力を

持っているはずだ。だが一向に少女が反撃してくる気配はない。そんな少女の態度に腹を立てているのだ。
「テメェ、なんで能力を使わない……！」
「あなたが使わせてくれないんじゃないですか！！」
いまいち、逃げ回るこの少女に本当に異能力があるのかどうかはなはだ疑問を抱いている傍観者の【遮断空間】はあくびをしながら伸びをしていた。
透音の口調からは自分が能力者であると公言するようなセリフがたびたび飛び出すのだが、一向に透音は能力を使う気配はない。二人の能力者男はすでに一つの結論に達し始めていた。透音があの時発した詠唱のような言葉は透音の祈りか、でまかせだったのではないかと。
つまり、透音には何の能力もないのではないかと思い始めていたのだ。
そんな結論に達してしまった彼ら――特に【大地の怒り】はもう半分飽き始めていた。だから無気力に土塊でただ少女を追い回すということをやっているのだ。もう一人の男に限っては最初――自分の役目を終えた時点ですでにあくびをするほどまでに飽きていた。
「う～～～～っ、こうなったら走りながら詠唱しないと……」
と、ようやく戦う気になったかのようなセリフが透音の口から出たが、それを信じるということができなくなりつつある【大地の怒り】はなおも無気力に土塊で追い回す。
透音は走りながら真剣な表情で息を切らしながら詠唱らしきものを唱え始める。
「えーと……。この世に生を受けし者。はぁ……はぁ……。我は……汝らの、はぁ……運命を創り、願い……はぁ、はぁ……」
果たしてこれが詠唱と呼べるものなのか、仮にこれが詠唱の言葉だったとしてこんなとぎれとぎれの詠唱で能力が発動するのか、そんな疑問を感じた【大地の怒り】は透音の足のつま先あたりの地面を盛り上げる。

「きゃっ！？」
透音はその盛り上がった土に足を引っ掛ける形で前に転倒。その上を透音のことをずっと追いかけていた土塊が通過。男は二人そろってため息を吐く始末。もう戦意なんて言うものが男たちにすらあるかどうかわからない。
透音は起き上がると男たちに向かって文句を言う。
「詠唱中断しないでくださいよ！　もう少しだったのに！」
男たちの再度のため息。もう透音は戦うべき相手として認められていない。
男が土塊を作り出し、無気力な表情でまた透音の方に向かわせる。
「あああ！　ちょっと待ってくださいって！」
【大地の怒り】は土塊を停止させるが、もう既に透音の要求を聞き入れている余裕はなさそうだ。本格的に飽きてきたのでそろそろ終わりにしようと思い始めたからだ。
透音はそんな男の胸中を知らず提案する。
「ちょっとだけ時間を下さい、そうすればとりあえず能力は使えますから！」
「……」
そんな提案に応じるわけもなく、透音は土塊に潰される、はずだったろう。だが、この況が状況だったおかげでそれはなかった。好戦的な【大地の怒り】のままなら問答無用で攻撃していただろうが、今は完全に戦意を喪失しただらけた状態だ。
そのため透音は瞬殺されることなく、奇跡が起きた。
「……分かった。一回だけだ。そうしたらもう終わりだ」
【大地の怒り】がそう無気力に答えるや否や、透音は立ち上がり急いで息を整える。
足を肩幅に開いて右手を前に出して右手首を左手でつかみ、反動を受けても支えられるような構えを創り目を瞑る。そして詠唱が始まる。
「この世に生を受けし者、我は汝らの運命を創り願いを壊す、汝ら

の願いははかなく消える。その運命を受け入れ神の決め事に従えッ」
そう言い終わると同時、透音の体を包むように青色の半透明の結界が出現する。そしてそれは【遮断空間】の結界と同じように膨張し、この病院を包んだ。
そのおかげで【大地の怒り】の眼にわずかな闘争心が見られたが、透音の次の行動を見てまたも無気力な目に変わる。透音は結界を張るとそのまま何もせずにこちら側を見ていた。
なぜその様子だけで【大地の怒り】が戦意を失うかというと、この少女が使った結界型の能力の性質ゆえにだ。本来【大地の怒り】などのような攻撃的な能力はたいていある固定されたもののみに有効という規定がある代わりに戦闘に置いては絶対的な力を与えてくれる。あの少年の場合は触れたものという規定、【大地の怒り】は人工物でない物という規定があった。
そして【大地の怒り】これまだ戦った数少ない能力者の中で結界型の能力者のことを思い出していた。ここにもう一人いる【遮断空間】も結界型能力者だが、今まで遭遇した結界型能力者は例外なくおおよそ攻撃には向かない能力ばかりだった。
【遮断空間】ならば空間外の人間は空間内の出来事を見る聞くことができず、侵入憂さできないという能力だ。だがこれは発動してしまうと空間内に見方がいない場合助けを呼ぶことができず、さらに攻撃手段がない能力ということになる。確かに自分の身を守ったり、何かを敵に見つからないようにすると言ったことはできるだろう、敵が結界外にいたのなら。だがあいにく結界型の能力者は結界のサイズを変えるということができないというわけでは無いだろうが、相当難易度の高い事らしい。かつて戦った結界型能力者には半径二百五十メートルから半径百メートルに縮小するということのできた奴がいたが、あいにくそれ以上の細かな結界のサイズ変化はできなかった。ただ、結界能力者にも結界内に通用する能力と結界外に通用する能力があった。結界内にいる者を対象にした能力、結界外にいる者を対象にした能力の二つがあったのだ。なので結界内に

いる者に対して発動する能力者は結界が大きいため有利――などということはなかった結界内の能力の場合、能力者の作り出す結界はとてつもなく小さかった。一番大きかった結界でも半径五メートルだ。そしてその結界内でしか能力発動ができないとなると、相手が結界外に出てしまえばそれですべて終わってしまう。

そのため結界型能力者は弱いことが多い。というのが【大地の怒り】の経験そうなのだ。

ただ、【遮断空間】のように能力慣れしているのならば結界の縮小、拡大は簡単であろうが、すぐ後ろのあくびを連発する男は半径二十五メートルから半径二百メートルへの変化までしか行えない。

自分の仲間を過大評価しているのか過小評価しているのかわからないが、彼としてはそれ相応の評価と思っているであろう。

【大地の怒り】は自分の仲間の【遮断空間】以上に応用のきく結界型能力者を知らないのだ。だから【大地の怒り】は目の前にいる少女に期待することができなかった。

「……で？　どォするんだ？」

「えーと……お、終わりです」

ため息を吐く【大地の怒り】。もうこれ以上は時間の無駄でしかないのでとどめを刺すべく少女に向かって土塊を突進させようと動かす。土塊は少女方に向かって突進した。

だが――。

土塊は少女には当たらず少女の右側に大きくそれて地面にぶつかった。そしてそのまま土塊が砕け散る。

別に少女が避けたのではない。無論土塊が方向を捻じ曲げられたわけでもない。ただ単に土塊が向かった方向がその少女から大きくそれた地面だっただけの話だ。

【大地の怒り】の脅しのようなその行為に透音は一切動じなかった。先ほどまであれほど必死に走り回って土塊と追いかけっこを繰り広げていた少女とは思えないほど堂々としていた。

【大地の怒り】は眉を寄せる。だが、少女のその堂々とした態度

にではない。それもあるがもう一つが自分の攻撃の軌道が思い通りに行かなかったことにだ。
【大地の怒り】は先ほどのあの攻撃を透音に当てるような軌道で動かしたはずだったのだ。そう動かそうとしたはずだったのだ。だが、実際軌道は大きくそれ、透音に当たることはなかった。
【大地の怒り】の能力は自然の物質を思い通りに操る能力。自分の思った通りに動かせないなどあるはずもないのだ。
「どういうことだ……。何が起きた……」
男は必死に考える。だが浮かんでくるのはただ一つの推測のみ――目の前にいる少女が何かしらの方法で自分の攻撃を避けた、いや避けさせた。
おそらく少女の能力だろう。だが、どういうことだ。少女の能力は結界型の結界外適応能力のはずだ。なぜ、こんなことが……。
【大地の怒り】が思考していると透音がしゃべりかけた。
「えーと、もう、いいですか……？　これ以上戦うとあなたたちの方が危ないんじゃないかなって思うんですけど……」
その自嘲気味な台詞と、その言葉の意味を理解した【大地の怒り】は今までになかった闘争心をみなぎらせた目で睨み付ける。
「いィや、楽しくなってきた。もしかしたら今まで戦った結界型能力者での中で一番強い奴かもしれねぇからな」
「えぇ～……」
透音は困ったような顔で不満の声を漏らす。【大地の怒り】は気にせず土塊を作り出そうとする。透音の真横で飛び散った土塊の破片を集めてそれを一か所に集め土塊を生成――。
しようと頭の中では思ったはずなのに、土が少々宙に浮くだけで土塊の生成は行われない。ならばと思い、透音の足元の地面を割り、地面に埋めて押しつぶそうとするが、地面が割れない。代わりに土塊を地面からくりぬいたときにできた穴に先ほど浮遊させた土が集まって地面を平らにしていた。
【大地の怒り】が初めて体験した状況だった。先ほどの少年のよ

うに能力を無効化されたのではない。能力は発動してそれはちゃんと動いている。だが、思い通りには動かない。本来の能力ではなくなっている。

「……能力を弱体化させる能力、か」

「違います、けど……」

すぐに透音の否定の言葉が【大地の怒り】の推測を打ち消す。

透音はしばらく逡巡したのち、自分の能力を語る。

「えーと、能力って、規定が大きいほど能力自体は強くなると思うんですけど……同じ能力でも結界内っていう大きい規定があるのと、人工物以外っていう規定だけっていうのだと、どっちが強い能力になると思います？」

透音は【大地の怒り】の言葉を待たずに続ける。

「多分規定が大きい分力が強くなると思うんですよ。だから同じ能力を持っていてもあなたの自然物だけっていうのと、あたしの能力の結界内だけっていうのと自然物だけっていう両方の規定の大きさだと、明らかにあたしの能力の方が強いと思うんですよ……」

「つまりは……能力者の優先順位の関係ってことか……？」

【大地の怒り】は一瞬で悟った、このままだと自分が絶対的に不利だと。自分の能力が発動したとして、それを上回る権力を持つあいつの大地を操る力で明確な攻撃にはならない。

相性は最悪だった。さっきの少年以上だ。

さっきの少年と透音の戦いになれば透音が負けるのは目に見えている、だがそんなことは関係なく、ただ単純な相性の関係上、少年と戦うより透音と戦う方が分が悪いというわけだ。

でも、目の前にいる少女の能力が自分と同じだというのなら、その能力でカバーが追いつく前に攻撃をぶつけてしまえばいい、と【大地の怒り】は考え付く。

「……やっと面白い展開になってきたじゃねェの……ッ」

【大地の怒り】は地を蹴り、少女の方へと駆け出す。それと同時透音の左右両側から土が吹き上がる。【大地の怒り】はその土で圧

迫して少女を潰そうとしたのだが、真上に向かって真っすぐ吹き上がった土は透音に触れることはない。すると今度はその吹き上がった土を自分の手のひらに集めようとする、【大地の怒り】と透音の距離はもう五メートルもない。【大地の怒り】は右手に集めた土をナイフのように圧縮しようとする。――だが、土はナイフの形を作らずに霧散する。

「チィ……！」

男は毒づきながら握るものをなくした手で拳を作る。その拳を少し後ろに引き、彼女との距離が一メートルを切ったところで左足を前に出して急ブレーキをかけ、左足に体重をかけるようにして体をひねり拳を打ち出す。

そのケンカ慣れしたようなスムーズな動作の右ストレートを透音は後ろに倒れそうになりながら斜め後ろに下がり回避する。その直後、彼女のすぐ後ろの地面から槍のような形状をした土が弓にはじかれて様に飛び出す。透音が振り替える間もなくそれは透音の背中に吸い込まれるように突き進む。だが――。

これもまた透音に突き刺さることなく、その寸前で槍を模った土は何かぶつかり、先から砕けるようにして霧散していく。

【大地の怒り】は驚き一瞬動きを止めるが、すぐに意識を戻し後ろに跳ぶ。

「どォいうことだ……！？」

口をついて出たその言葉は焦りが混じったかすれた声だった。

男が驚愕するのも無理はない。なぜなら透音は男の最後の攻撃――後方からの槍の突きに気付くことすらできなかったからだ。透音がその軌道に気付く暇もなく、それは透音の背中を貫き貫通するはずだったのだ。

だが透音はそれを見もせずに、気付きもせずに防いで見せた。いや、防いだわけでは無いのかもしれない、なぜなら透音は気づかなかったのだから。男の攻撃に気付かずに、しかしそれでも自分の能力を使い回避する、などということは不可能だ。能力はあくまで自

分が意識的に発動するものであって、【遮断空間】のような結界を張るだけで能力が発動するものとはわけが違う。
なら、どうやって透音は攻撃が当たるのを防いだのだろうか。そんな焦りと疑念とが混ざった思考を断ち切るように透音が言う。
「えーと、もういいですか？　これ以上戦っても決着なんてつかないと思いますよ……？」
その勝利宣言じみたセリフを聞いても、男は怒りに狂うこともできない。驚愕とは、そういう感情的な面すらも停止させてしまうのだ。
「……あの～……」
透音の再度の呼びかけでようやく驚愕から意識を引きはがすことに成功した【大地の怒り】は透音の方を睨む。透音はビクリと身を震わすが、それも一瞬。男は振り返り廃病院に右手を向ける。
「え、あの……？」
透音の戸惑ったような声が小さく響くが、男はそれに気づかずになおも手を病院に向けている。透音はあの幼年と同じことを考えているだろう。戦うのがめんどくさいと。まぁ、誰しもそう思うだろう。こんなにしつこくされては。
透音がもう一度声をかけようとした。瞬間――。
地面が震えだし、透音の平衡感覚を狂わせた。驚いた透音はきゃっ、と短い悲鳴を発する。
「……さすがに、能力者とはいえ、一日に二回も、しかも女に負けるっていうのはいくらなんでも、かっこつかねェよなァ……」
大地が、震え始める。そして男が手を向けた先、廃病院を黒い影が包み込む。
だがもちろん影なんて言うもの男操る力を持つ者はこの場に誰一人いない、その黒い波をよく見ると、それは土、砂、石、あらゆる大地を構成する自然物をまとめたものだった。
それが廃病院を包み込もうとする。
「っ！？　何をしようとしてるの！？」

透音が奇異の声を上げる。男はにやりと笑い、得意げに答える。
「建物なんかの建築物は人が手をかけたものだから俺の能力じゃ操れない。でも、お前だってそうなんだろ？　なら、間接的に操ればいい。たとえば、地面を操って病院全体を動かすとかな」
そう言われても、透音は理解できなかった。なぜそんなことをする必要があるのか。いや、だが彼の能力は発動している、動かすことが目的ならば発動はしない、透音の能力が介入してくる。つまりこれは何かの下準備ということ。
廃病院が土に包まれ、球体となる。
「なぁ、病院が崩れたら、お前はどうする？」
にやりと、もう一度首だけを透音の方に向け言う。
何をしようとしているのかは理解した。そして、その結果も。そして同時にそれをやるはずがないと、透音は思った。なぜなら、病院を崩して、能力介入できない攻撃を仕掛けたとして、自分たちはどうなるのかということがあるからだ。確かに、透音の立ち位置を見れば病院が透音の方に崩れてくれれば確実に、潰される結果となるだろう。だが、そうなると二人の男は、どうなるのか、透音と病院の間に立つ二人は、どうなるか……。
「……三人とも……っ」
押し潰されて、命を絶たれるだろう。
透音は、いま、この場で自分の能力を駆使して男の行動を止めようとはしなかった。いや、止められなかった。規定の問題ではない。根本的な能力の問題。透音の能力は、何かを操ったりする戦闘的な能力ではない、はったりだ、男に言った言葉は。だが、同時に無力なわけでは無い。戦闘向きではないものの、仲介役、戦いを抑えるということはできる。
だが、その必要はない。ここで戦いを止める必要は何一つない。簡単に解決するんだから。絶対的な権利があると知れば、男たちは何もできない。ここで透音が心の中で、一つのことを思えば。

孤独な運命

土球がはじけ、中の廃病院も崩れる。その二つの津波が頭上から振り注いでも、その場の二人は、動こうとはしなかった、少女は動こうとしない。男は動けない。もう一人、無力な結界能力者の男は、逃げ出そうとした。だが、必要ないのだ、逃げる必要が。

――誰も、死なせないから。

透音がそう思ったのと同時に、降り注いだ津波は三人を飲み込んだ。周囲を土埃が包み込み、廃病院のコンクリートの残骸が散らばる。

大小様々の灰色の瓦礫が周囲に凹凸を作り出す。砂煙、土埃に覆われたあたり一帯は瓦礫が埋め尽くした。ただし大小さまざまな瓦礫は時に、壁のように突き立っている。

「……なんだよ、これ！？」

【大地の怒り】はその現象を目撃し、驚愕に目を見開く。

自分の目の前に、ひときわ大きい瓦礫が、盾のように突き立っているではないか。そのおかげで自分は今かすり傷だけで済んでいる。

ただ、それが偶然なのかそうでないのか、それは周りを見ればわかった。なぜなら、自分だけではなかったんだ。この場にいた三人が三人、全員の居場所に同じようなことが起きている。誰一人として、致命傷を負ってはいない。

「……運命は、悪戯ばっかり起きるものなんですよ。あたしが何かを操りたいと思ったら、そうなるかもしれない、何かが起きてほしくないと思ったら、起きるかもしれない、そんなあいまいな力。それがあたしの能力【運命の悪戯（アクシデント）】です」

その場の男二人が、同時に思ただろう。今の言葉を簡潔に要約するならこうだろうと。

――私は運命を操れます。

透音の力は神に等しいものだと。その力は何よりも絶対的な権力を持っている、世界の、人に課せられた運命、それは彼女に握られ

たものだと。だが、透音は否定した。
「でも、あたしの能力は強い能力でもなんでもないんですよ。だってこの能力はさっきも言った通り、あいまいで、発動するのが確かじゃないんですよ。あたしがこうしたいって願ったらそうなるっていうわけじゃない、可能性が起きるだけ。絶対的な力じゃない。だから、あたしは運がよかったから生き残れた。運が悪ければ生き残れなかった。あたしの能力はもしかしたら本当の使い方をすれば強いのかもしれない。けど、それが分からない今のままじゃ、偶然に頼るしかないんですよ」
長々と、透音が説明する。だがそんな言葉は男たちには届いていない。驚愕、焦り、それが支配してしまっているのだから。男二人は、逃げたいとしか思えなかった。神のもとから。
透音がまだ説明を続ける。
「この能力は、あたしの従兄に一つだけ解明してもらえました。だから一つだけ絶対的な権力があるともいえるかもしれません。それが、あなたの能力と相性が良かっただけ。思った通りにできるという能力に限っては、あたしの能力は無敵です」
相手の思った事を起こさないという絶対条件があったから。
つみあがった瓦礫がガラ、っと音を立てる。【大地の怒り】が動いたのだ。透音の方に向かって。
「この世に生を受けし者、我は汝らの運命を創り願いを壊す、汝らの願いははかなく消える。その運命を受け入れ神の決め事に従え。それがあたしの能力。詠唱で言った通り、人が使っていい範囲を超えた、最低な能力です」
【大地の怒り】は、透音の前に現れる。だが間があった二人の間に戦う意思は見られない。透音はまっすぐに目を合わせ、【大地の怒り】は不安そうに眉をひそめている。
「……すまなかった。もう、戦いはやめにしてくれ。俺の方が仕掛けておいてこんなこと言えた立場じゃないが、見逃してほしい。この通りだ」

そう言って、腰を折り、頭を下げる。
本当の殺し合いの意志を持った殺人鬼ならば、こんなことはしなかった。最後まであがいて、自分を殺して相手を殺した。いや、それをやろうとして、防がれてしまったからこそ、こうして冷静になっているのかもしれない。
「俺はもう、無意味に戦いを強要したりしない。だから、見逃してくれ……」
恐怖の象徴が目の前に立っていると、今錯覚しているかのような態度の代わりよう。なぜこんなバカげたことをしているのだろう。傍から見れば都合のいいアホな台詞、考え、願いだと言って切り捨てるだろう。
いきなり話が飛んだようなこのセリフ、理解のできないものは多いはずだ。でも、透音にはわかる。透音は昔にも、同じように懇願されたことがあったのだ。自分の力を理解していなかったときの子供のちょっとした能力発動時。発動理由は、詠唱を行ったから、成功したからだ。能力発動のカギとなる言葉を、理解してしまったから。
従兄の目の前で能力を発動した透音は、何が起きたかわからなかった。
従兄がただ、興味深げに透音の作り出した結界を見ていた。
従兄が発見したのだ、透音の能力発動呪文と呼ぶべき言葉を。それを透音に言わせた、愚かな好奇心で、透音のこの、不安定な概要も知れぬ能力が発動した。
そこで従兄はいろいろなことをしたが、何の変化もなかった。がっかりした従兄は結界から出ようとした。だが、出られなかった。叩いても蹴っても、出ることはできなかった。透音に結界を解くように言っても、透音がその方法を知らない。閉じ込める能力なのかと思ったが、そんなことより状況を打破したかった従兄は、透音にいろいろと試してくれと言った。だが、何をどう試すというのか理解できない子供の透音には、それの意味を理解するのは難しすぎた。

ただ時間が過ぎていく、閉じ込められた孤立した場所で。従兄は焦りだし、やがて頼むようになった。懇願した、透音に向かって。悪かったと、見逃してくれと、出してくれと。
透音は、そんな思い出したくもない過去があったから、嫌だったのだ。
何が嫌だった？　自分で自分を守る力があることが。相手を圧倒してしまうような権力がある自分自身が、それを使ってしまうことが嫌だった。
「……もう、家に帰りませんか？　もう眠くなっちゃったので」
透音は、そんな自分が嫌で、そんなおびえた態度を自分に向けられるのが嫌で。
だから透音はこういう言葉を覚えた。自分から離れていくための言葉を。
「……すまない」
【大地の怒り】はそういうと逃げるように【遮断空間】のいる方へと歩き出した。ほどなくして、この辺りを覆っていた結界の片方、空間を遮断していた壁が消える。
透音は、歩き出す。荒れ荒れになってしまったこの場所を自分の居場所にしていた孤独で寂しい少年を見つけるために。
病院を出て、どこに行ったのか、どっちに進むべきなのかもわからないまま無表情でさまよっているであろう少年を見つけるために、自分の勘を頼りに歩き出す。
透音は、すがるように少年を探そうとしている。
彼が孤独でいるのを寂しいと思っているから。
でも、少し違う。寂しいのは彼ではなく、透音だと、自分自身だとわかっている。
だから、求めていた。非現実的なロマンチックな展開を。
自分に能力があるというだけでは非現実ではない。透音の求める非現実とは、自分を守ってくれる運命の人、言い方を変えるのなら白馬の王子様を待っている，だからその可能性を持った少年レイに、

孤独という非現実を持った彼に、願いを受け入れてもらいたい。
自分の願いは、自分が満足するための物。自分は散々そんなものを壊してきた、絶対的権力で、他人の願いを壊してきた。そんな自分が自分自身の長いのために頑張る資格なんてないのかもしれないと透音は思っている。けど、それでも、透音は捨てられなかった。その願いを。
街灯が道を照らす中、空に目を向けても星はかすかにしか見えない。周りに光がある今の状態では、星を見ることはままならない。
透音は彼を早く見つけたいという衝動に駆られ、歩調を速くする。
どこを目指せばいいのかわからない。彼がどんな意志を持ってどこに居ようとしているのか、透音には理解できる範疇ではない。それもそうだろう。非日常は、日常とは交わらない。引き込む、乗っ取るしかないのだ。それは今までなかった。
どこに行くか、その場所が決まらなければ歩いていても意味はない。でも、彼が居そうな場所の見当なんか、と透音は一つ思い至る。
一日中、誰も近づかないような廃病院の屋上にいたのを見た。出会いは誰も出歩かないような深夜の小さな公園。他人とかかわろうとしないあの態度。
もしかしたら、人気の無いところにいる……？
そう思ったが、しかしいったいどこに行けばいいというのだ。今の時間帯、人気の無い場所などいくらでもある。さっきいた廃病院などというところならもちろん、市民公園なんかでも人気はないだろう。
……なら、行ってみる価値はあるのかもしれないと、透音は思った。彼と出会った公園に。あそこなら、いや、あそこ以外思いつく場所はない。もしいなかったら、会えなくなってしまうのだろうか。廃病院というホームをなくしてしまった今、彼はこの町から出て行ってしまうのではないか。
透音は方向転換し、公園に向かう。
予想。これはただの予想、推測にすぎないことだ、っと透音が心

の中でつぶやく。
　あの子はもしかして、本当は、本当に寂しいのではないだろうか。だって、あの時の言葉は自分か一人でいることを望んでいるような言葉じゃなかった。「もう消したくないんだ」なんて、本当に誰とも繋がりを持ちたくないなら、いっそ消してしまえばいいのだ、すべて、何もかも、この世界ごと。
　けど、それをせずに人に触れてしまうのは――能力が発動してしまうのを避けていた。それは、せめてものあがきだったのかもしれない。自分が一人でも、それを誰かに押し付けたりはしないという。意思表示だったのかもしれない。
　だから本当はそんなさだめが、能力が、力がなければ、彼は誰かといたいと素直に言えたのではないか。透音はそう思うと、胸を押さえずにはいられなかった。
　目の前に、児童用に作られた市民公園の入り口が見える。その奥に、透音と大差ない身長の男の子か女の子かすらわからないシルエットが見える。髪の毛も、男の子にしてはすこし長い、女の子にしては少し短い、抽象的ない出立ち。
　透音が公園に入って、その姿をとらえると、話しかけた。
「……レイ」
　そうつぶやくように名前を呼んだが、返事はない。
　透音は近づいて行って、その手をつかもうとする。だが当然目の前にいる彼――透音が例と名付けた少年は拒絶するようにサッ、っとかわす。
「この世に生を受けし者、我は汝らの運命を創り願いを壊す、汝らの願いははかなく消える。その運命を受け入れ神の決め事に従え」
　優しく、ささやきかけるような魔法の言葉が流れる。透音の詠唱。
　二人を包む空間が現れる、半透明な外界を隔てる壁。二人だけの箱の中。
　透音が再度手を伸ばすが、これも避けられる。そんなことを何度か繰り返すが、結果は同じ。

でも、透音が追いつめるようにレイを公園の端へと後退させていく。これ以上下がると公園を囲むように植えられている花や木を消してしまう。

透音が、逃げ場をなくすように両手を広げる。そしてそのまま近づいて行き、抱きしめるようにして捕まえる――ことはできなかったそれは避けられた。だが、体勢を崩したレイは、転びそうになる自分の手をつかもうと迫る手を躱すことができなかった。

パシッ、っと透音の手がレイの手首をつかむ。

「ッ！！！！」

レイが驚愕に目を見開く、目の前の透音を凝視する。

「大丈夫、消えたりしないよ」

透音が優しくささやきかける。レイが自分の右手首をつかむ手を凝視し、固まる。

信じられないものを見ているかのような、いや、実際信じられないものを見ているのだ。自分の存在が体質のように持っている能力、触れたものを消してしまうというその能力が、現象として発動しない。能力が発動しない。それは信じられないことだ。レイは今までどんな時でも触れたものを消してしまったから誰かに触れることを拒んできたのだ。それがこの一瞬でいとも簡単に破られた。信じられない。

レイの心境を悟った透音はもう一度、レイの眼を見て言った。

「あたしは、消えたりしないよ」

それは、救いの言葉だったのだろうか。それは当人たちにしかわからない。この現場を誰かが目撃していたとしても、どんな心境だったのかなんて、毛頭わからなかっただろう。

透音はまだ、言葉をつづけた。いつだか訊いたような言葉を。

「あたしは春川透音。中学一年生の、レイの運命を変える人だからです」

少年はなおも、驚愕に目を見開いていたが、状況を理解できていたのだろうか、その瞳がしっかりと、自分の手を握っている女の子

の顔をとらえていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2321w/

孤独からは逃げられない

2012年1月14日17時54分発行